

直立不動で歌う、あまりにも律儀な歌。  
だが、その歌には哀感がこもり、  
聴く者の臉を  
閉じさせずにはおかなかつた

文 山川智

作詞は佐藤惣之助、作曲は竹岡信幸。  
歌は？

その歌声が蓄音機から響いたのは  
昭和9年2月だった。

「泣くなよしよし ねんねしな  
山の鴉が 啼いたとて」

声は伸びやかで、律儀な歌であった  
旋律は哀愁に満ち溢れ

歌詞は、肺腑をえぐるような情感を漂わせた  
曲は、紅灯うら寂しい巷に流れ

人々の口の端からは  
メロディーが綿毛のように風に乘っていった

歌手は、東海林太郎  
誰も知らない歌い手だった

歌う姿は直立不動、燕尾服  
そこには自分を律する哲学があった

東海林太郎の歌は大衆に支持され  
昭和動乱を生きた歌い手となった

昭和47年命脈絶え……享年73  
葬儀は史上初の「音楽葬」であった



若かり頃の東海林太郎  
(昭和11年)

## 昭和歌謡 誕生物語 [第24巻目]

# — 赤城の子守唄 —

東海林太郎

筆者が生まれたのは昭和37年（1962）。したがって大活躍していた頃の東海林太郎はむろん知る由もない。ただ、子供の頃に親た懐メロ番組でバーマがかかった白髪にロイド眼鏡をかけ、燕尾服で直立不動のまま「赤城の子守唄」を歌う彼の姿が、いまでも記憶の中に残っている。

東海林のレコード・デビューは昭和8年（1933）3月、ニッポーンレコード（日東蓄音機）から発売した「字治茶摘歌」だった。御年34歳。

というのも、東海林は早稲田でマルクス経済学を学んだ後、満鉄に入社。だが、そこで書いた「満州に於ける産業組合」があまりにも左翼的だったことで鉄道の図書館に左遷。7年後に退社し帰国した彼は、弟と一緒に早稲田で中華料理店を営みながら、下八川圭祐に師事し音楽を学ぶことになるのである。

東海林はニッポーンで12曲録音。その後コロムビア、キングを経て、続くポリドールで昭和9年2月に発売したのが「赤城の子守唄」だった。作詞は佐藤惣之助、作曲は竹岡信幸。国定忠治を題材にしたこの曲は松竹映画の主題歌だったが、映画をしのぐ大ヒットを記録。一躍流行歌手の仲間入りを果たすことになる。

だが、本人の気持ちはヒットの喜びとは別のところにあつたようで、

「わたしは与えられた楽譜の中の魂をどうして引き出すか、そののみを考へる。どうしたら人類で最高に歌えるか（中略）だってその歌は、わたしが世界で初めて歌うんだから」（後援会機関誌「東海林太郎」より）

つまり、東海林は「赤城の子守唄」をはじめ、自分に与えられた歌すべてを徹底的に研究し尽くし、その曲にふさわしい最高の歌い方することに心血を注いだ。そして、歌を表現するに適切なスタイルが直立不動に燕尾服だったというわけだ。

晩年は直腸癌により直腸を全摘出。人工肛門が付いた腹に晒しをギョッと巻きつけながら歌ったという東海林。その背筋をピンと伸ばした姿勢は剣豪宮本武蔵を彷彿させ、「一唱民衆」という言葉のごとく、「歌は民のため」という信念を貫いた。

大正デモクラシーから昭和という激動のうねりのなかで、大衆歌手に身を転じ、常に真剣勝負で歌に魂を注ぎ込んだ東海林。そこには、彼なりの哲学があり不動の精神があつた。

山川智 ●1962年東京生まれ。テレビ制作会社、週刊誌記者を経てフリーランスに。著書に「東方神起の謎」「東方神起 17歳を行く」（共にイーストアレス）、「ビニーマンドキョウモント 幸せのさすな」（リール出版）など。また出版プロデューサー作品として「生きる 藤家弘介」（スターツ出版）、「アキる社員」（狂食ギヤ）と（共にイーストアレス）など多数。